

特集

トップアスリートと企業をつなぐ ～アスリートが企業の活力向上に～

いよいよロンドン五輪が7月に開幕する。トップアスリートたちは、この日のために過酷なトレーニングに耐えてきた。しかし、そのトレーニング環境が十分に整っているのは一部の選手でしかない。多くは不安定な経済環境の中でトレーニングを行っているのが現状だ。企業にとって、そんなトップアスリートを支援する方法の一つが“雇用”である。今号では、2月に開催されたトップアスリート就職支援「アスナビ」の説明会を中心に、トップアスリートのコーチへのインタビューや企業で活躍するトップアスリートの事例、さらには2020年の五輪招致に向けた座談会を掲載する。企業にとって、トップアスリートを雇用するメリットはどこにあるのか、トップアスリートは、ビジネスパーソンとしても企業の戦力になり得るのか。トップアスリートの資質に迫った。



INDEX

I コーチ・インタビュー 03

平井 伯昌 氏(ロンドン五輪 競泳日本代表ヘッドコーチ)

II トップアスリートの支援・雇用に向けた説明会 04

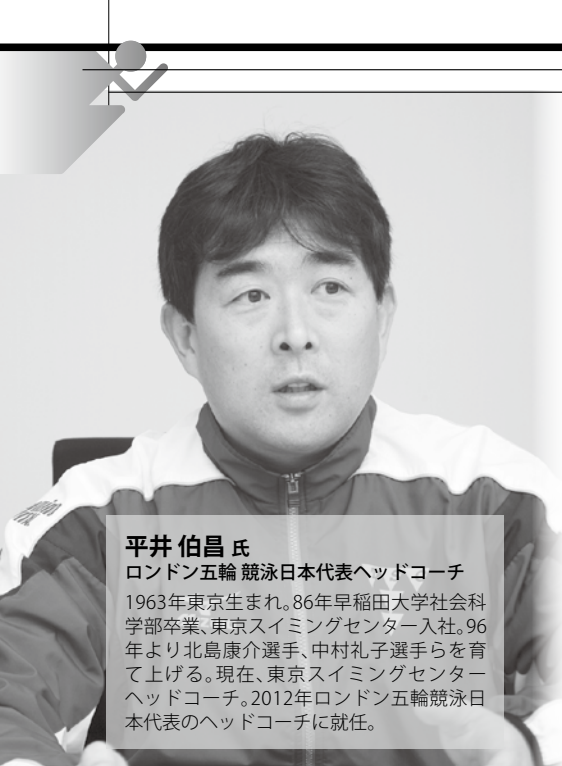
- ①挨拶・基調講話・概要説明
- ②採用企業パネル・ディスカッション
- ③トップアスリート・プレゼンテーション

III 企業の取り組み 09

地域活力創造チーム—大阪ガス／堺ブレーザーズ

IV オリンピック招致へ向けて 11

橋本聖子氏、山下泰裕氏、宮嶋泰子氏



平井 伯昌 氏

ロンドン五輪 競泳日本代表ヘッドコーチ

1963年東京生まれ。86年早稲田大学社会科学部卒業、東京スイミングセンター入社。96年より北島康介選手、中村礼子選手らを育て上げる。現在、東京スイミングセンターヘッドコーチ。2012年ロンドン五輪競泳日本代表のヘッドコーチに就任。

I コーチ・インタビュー (2月9日取材)

トップアスリートは ビジネスパーソンとしても 高い資質を兼ね備えています

世界を相手に、心身の極限に挑むトップアスリートたち。コンマ1秒のタイムを求めて過酷なトレーニングを強いられる彼らの資質とは何か、またそれは、ビジネスの世界でも活かせるものなのだろうか。北島康介選手など世界レベルの競泳選手を数多く育て上げた平井伯昌コーチが語った。

品格と国際感覚を備えた 現代のトップアスリート

一昔前は「五輪に出るようなやつは生意気で一癖ある」などといわれていましたが、今は、それでは世界レベルでは戦えません。世界で戦うには、技術や強靱な精神力も不可欠な要素ですが、同時に人間性や国際的な感覚も身に付けなくては淘汰されてしまいます。

アスリートは、一般の若い人に比べて、大人と接する場面が増えています。スポーツ科学の発達に伴い、トレーニングはもちろん、メンタル面や栄養面なども含め、あらゆる専門家と連携して、選手たちは心身を鍛え上げていくのです。

さらに、日本代表として参加する国際大会では、大会関係者や他国の選手と接することもあります。日本代表ともなると、単に競技力だけではなく、アスリートとしての品格が問われるようになったのです。

北島康介が高校生のころ、大人と接する機会を少しでも多く持ってもらうため、積極的に取材対応をさせました。こうした経験の中で、「公人」としての礼儀やマナーを学ばせたかったのです。

国際大会への進出機会が増えること

でアスリートの国際感覚も向上しています。語学はもちろんですが、それ以上に大切なものは、グローバルなルールやマナー、そして多様性を受け入れる感覚ともいえるべき意識です。

北京五輪で北島が金を取った瞬間、遠くのコースにいたブレンダン・ハンセン選手(米国)が握手をしに来てくれたのが印象的でした。国際舞台を多く経験した選手ほど、互いを受け入れリスペクトするという意識が育っています。また、海外の選手はスポーツマンシップを非常に重視するので、その姿勢から学ぶところも多いのです。

トレーニングの経験は 仕事のPDCAにつながる

ビジネスの場には「PDCAサイクル」がありますが、アスリートの練習もまさにこれの繰り返しです。それも科学の視点からかなり細かくチェックし、修正し、トレーニングの計画を練っていきます。これを繰り返すことで、最高のパフォーマンスが生まれるのです。この資質は、ビジネスの現場でも十分に活かすことができるでしょう。

そして、彼らは行動力にも長けています。東日本大震災のときも、いち早くアスリート仲間が連携し合い募金活

動を始めました。また、五輪出場歴のあるアスリートたちが、仕事の場でイノベーターの役割を果たして活躍している例もあります。人間性にも優れていますので、人望も集まるのでしょう。

さらに言えば、チームワークや協調性を非常に大切にしています。水泳でも、競技は個人種目ですが、チーム・ジャパンとして国際大会に臨みますので、結束力は非常に高い。リレーで選手たちが個人種目以上に盛り上がるのもうなずけます。

彼らは仕事の機会さえ与えられれば、その資質を仕事に応用していくことができる、そう確信しています。企業がトップアスリートを雇用した際には、遠慮せずにどんどん仕事を与えてやってほしいと思います。

企業の社員の方にとっても、こういった資質を持つトップアスリートと一緒に働くことは、貴重な経験になると思います。社内イベントでアスリートを活用したり、大会で応援したりすることで、社員の一体感の醸成にも役立つでしょう。アスリートもまた、社員というたくさんの仲間の応援により、感謝の気持ちとそれに応えなければという責任感を強く持ち、より力を発揮することがあります。お互いの相乗効果は計り知れないものがあると思います。

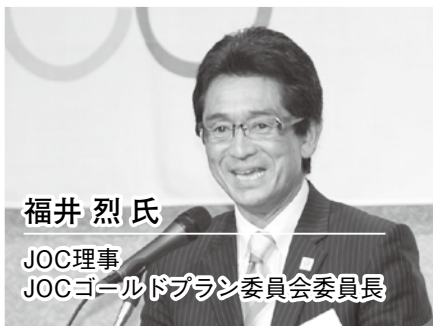
II トップアスリートの支援・雇用に向けた説明会 (2月22日開催) —①挨拶・基調講話・概要説明

企業とトップアスリートの有益なマッチングを!

経済同友会会員向け、日本オリンピック委員会(JOC)によるトップアスリート支援「アスナビ」説明会が開催された。トップアスリートにとっては、企業に直接アピールできる場でもある。挨拶の後、瀬古利彦氏による基調講話、荒木田裕子氏による概要説明が行われた。



アスリートの環境の向上と企業の活性化に期待



福井 烈氏

JOC理事
JOCゴールドプラン委員会委員長

開会に先立ち、挨拶に立った福井烈JOCゴールドプラン委員会委員長は、「世界を目指すトップアスリートが将来に不安を感じることなく競技生活に集中できるよう環境を整えたい、と企業に支援をお願いしている。2010年に経済同友会の支援で開催した会合を皮切りに、現在では、この説明会を全国で展開している。ご理解に深く感謝したい。アスリートの活躍は日本国民に大きな夢と感動を与え、特に若者に大きな影響力がある。トップアスリート

は日本が誇る宝だと思っている。一人でも多くのトップアスリートに企業との縁が生まれることを切に願っている」と語った。

また前原金一副代表幹事・専務理事は、「説明会によって、すでに6名のアスリートが就職を果たしたが、依然としてスポーツ選手を取り巻く雇用と練習の環境は大変厳しい。中には期待されながらも競技をあきらめざるを得ない選手もいると聞く。この会合によって一人でも多くのアスリートの生活と練習環境が向上するよう、また企業側の活性化につながるよう、大いに期待している」と述べた。

【基調講話：瀬古利彦氏】

大学駅伝が終わってすぐ、私はエスビー食品への就職が決まった。だが、入社したころは、よく会社名を間違えてアナウンスされ、それが悔しくて、絶対に自分が会社を有名にするのだと誓った。それから3年間頑張り、皆に

知られるようになったのが非常にうれしかった。また、さまざまな場所で社員の方々が一体となって応援してくれた。スポーツにはこうした大きな力があるのだと実感した。



瀬古 利彦氏

JOCゴールドプラン委員会委員

経済情勢は依然として厳しいが、世界を目指すアスリートたちを皆で支える世の中であってほしい。アスリートもこうした厳しい環境の中で頂いた支援に対して、感謝の気持ちで誠心誠意の気持ちを持って仕事に励み、全身全霊で仕事と競技の両立を図り期待に応えてくれると確信している。皆さんの支援でやる気のある若者の夢をぜひかなえてあげてほしい。

■「アスナビ」概要説明

ワンカンパニー・ワンアスリート

「アスナビ」は、「ワンカンパニー・ワンアスリート」をコンセプトに、トップアスリートの就職支援を行っている。

さまざまな方々の力添えにより、これまでに6名のアスリートの就職が実現したことは、大変うれしく心より感謝申し上げます。この6名のアスリートたちは、今、充実した環境で夢に向

かって練習や仕事に励んでいる。今日出席している選手、それぞれの思いにも耳を傾けてほしい。

震災では、アスリートたちが募金活動やチャリティーイベントを企画するなど、さまざまな活動を自ら実施している。世界を目指した競技生活を送りながらも、このような行動力や社会に



荒木田 裕子氏

JOC理事
JOCゴールドプラン委員会副委員長

貢献したいという強い思いがある。ぜひこうした資質を見極めていただき、その力を企業に役立ててほしい。

企業におけるトップアスリート採用の目的とその効果

トップアスリートの採用は、企業にどのような効果をもたらすのか、また課題は何か。前回のアスナビ説明会でトップアスリートを採用した第一三共とキッコーマンの人事担当者が、採用の経緯やその後の活用の方法、メリットについて語った。



第一三共

企業スピリットに一致した人材を採用

当社では、「先進の志」「誠実さ」「情熱」からなる三つのスピリットを全社員の価値観として共有しているが、これがアスリートの採用につながった。

当社は2007年4月、旧第一製薬と旧三共が経営統合した。その直後から企業としての一体感と企業風土の醸成、グローバル化の推進、それらを促進するための多方面での方策を模索し、社員がお互いに成長を促し意識の高揚につながる仕組みや機会を検討していた。併せて生命関連企業としての責務を果たすとともに、社会と調和し社会に貢献する活動の具現化を推進してきた。

こうした中で、経済同友会の会員である現相談役がアスナビ説明会で競泳の古賀淳也選手と出会い、紹介があった。チャレンジ精神や情熱が当社の企

業理念やスピリットと一致するとの考えから、非常に有意義だと判断、2011年1月、採用を決定した。ただ各関係部門への採用の趣旨やコンセプトの説明には十分配慮した。

社員の一人として彼の専門性を活かす

雇用形態は契約社員だが、貴重な人材ということで特別な契約や腰掛け的な契約ではなく、社員として接していく内容で契約した。所属は人事部で、役割は社員の意識高揚や第一三共グループの一体感の醸成である。現在は競技に集中的に取り組み、アスリートとして活躍することを優先、具体的にはロンドン五輪出場に向け全力を傾けてもらっている。社内では短水路選手権の優勝パーティーを開いたり、各研究所を訪問し懇親会に参加してもらったりした。また社内報では定期的に活動を紹介している。社内ポータルサイトに



はブログを設けて彼に発信してもらい、社員とのコミュニケーションに活用している。

こうしたことから各方面で反響があった。まず社員有志が彼の出場する大会で積極的に応援している。また社内での講演や懇親会などに呼ばれることが多くなった。海外グループ会社でも話題に上っている。社内ポータルには社員から応援メッセージが届く。営業の得意先で話題が共有でき、学生向けの会社説明会や面接では、「古賀選手に会えるか」といった質問も受けるようになった。

ただ、古賀は当社のマスコットや広告塔ではなく、社員の一人として彼の専門性を活かし、会社に有形無形の貢献してもらおうと考えている。アスリートを社内でどういう位置付けにするのか、その徹底が大事だ。

将来的には社員としての仕事を検討する。新人や若手社員の研修で彼の経験を紹介してもらえば非常に良い研修になり、活躍の幅も広がると考えている。



古賀淳也／競泳(背泳ぎ)



職場訪問会の様子

1987年埼玉県生まれ。早稲田大学スポーツ科学部卒。2006年ドーハ・アジア競技大会50m背泳ぎ優勝、2009年日本選手権50m・100m背泳ぎ共に優勝、同年世界選手権50m背泳ぎ2位・100m背泳ぎ大会新記録で優勝(共に当時日本新記録)。2011年競泳国際大会代表選考会50m背泳ぎ優勝。

キッコーマン

競技生活が終わっても
当社で勤務するのが条件

2011年4月にアスリート2名を採用した。一人は競泳の上田春佳選手。自由形の第一人者で日本記録を連発している日本では指折りの競技者だ。今は4月のロンドン五輪最終選考に向けて練習に励んでいる。

もう一人はカヌーの竹下百合子選手。ロンドン五輪最終選考では日本選手中2位で、残念ながら出場は逃した。

初めて二人に会ったとき、共に人柄、競技に向かう姿勢に好感を持った。正社員と同じような働き方はできないということで、本人たちとも話し合った上で嘱託社員とした。ただ入社時点から正社員と同様に扱っている。将来競技生活を引退しても、当社で勤務して



松崎 毅氏
キッコーマン 人事部長

もらうということも採用のポイントだった。配属先は持株会社の人事部で、実際の職場は広報部。そこでホームページやグループ報の制作を担当している。

彼女らを採用するきっかけは、経営トップがアスナビ説明会で趣旨に賛同したこと。良い人材がいれば複数名、いなければ採用なし、という方針で臨み、エントリーシートの中から二人をピックアップした。一名に絞り込むことも考えたが、二人とも私どもの社員としてふさわしいので悩んでいたとこ

ろ、二人とも採用するようトップが判断した。トップが前向きに取り組むことが、アスナビにとって大きなポイントだ。今日出席の採用担当の方もトップに熱い思いを伝えていただきたい。

社内に明るい風を
吹き込んでいる

初めてのことで、処遇や働き方、応援態勢などの設計では難しい面もあった。基本的には競技生活が中心で、可能な範囲で出社してもらっている。彼女らには競技の成果を出すことと、社会人として仕事を通じて成長することの二つをミッションとしている。

昨年夏には上海で競泳の世界選手権が開催された。社員でツアーを組み上田選手の応援に行ったところ、「世界に立ち向かう姿に熱くなった」「皆で応援していきたい」という声が上がった。

関西地区の事業所では竹下選手を囲む会を開催した。そこでも社員は竹下選手が身近な存在になったと話しており、連帯感、一体感を醸成するためにアスリートは貴重な存在だと感じた。富山や浜松で競技大会が開催されたときには、各支店のメンバーが応援に駆け付けている。

その他、当社の飲料のポスターに登場したり、ブログを書いてもらったりしている。二人が社内に明るい風を吹き込んでいることは間違いなく、社員らの反応も良い。二人に会いたいという声があちらこちらからあるが、なかなか時間が取れない。今秋以降、積極的に社員との交流の場をつくりたい。二人の選手に対する社内の関心は高く、連帯感が醸成されつつあると感じている。

今後は全国の拠点と一体となって、どう応援態勢を組んで盛り上げていくかが課題である。



上田春佳／競泳(自由形)

1988年東京都生まれ。日本大学経済学部卒。2008年北京五輪200m自由形予選で日本記録樹立、400mメドレーリレー6位。2010年広州アジア大会100m自由形3位、200m4位。2011年競泳国際大会代表選手選考会100m・200m自由形共に優勝。9種目で日本記録を保持。



競泳国際大会代表選考会での応援



竹下百合子／カヌー

1988年東京都生まれ。早稲田大学スポーツ科学部卒。2008年北京五輪4位(日本歴代最高位)。2010年NHK杯カヌースラローム競技大会優勝、カヌースラロームジャパンカップ優勝。2011年NHK杯カヌースラローム競技大会3位。



NHK杯全日本カヌースラローム競技大会での応援

企業のサポートを望むトップアスリートの思い

アスナビ説明会の最後に、ロンドンおよびソチ五輪を目指すトップアスリート7名(内ビデオ2名)が登壇した。彼らは皆、競技生活を続けるには厳しい環境に置かれている。その現状とロンドン、ソチへの意気込み、また就職への思いを語った。



今井 啓介 氏●ビーチバレー

32歳、中央大学法学部卒業。2008年インドア大会で優勝。09年よりビーチバレーに転向。11年ロンドン五輪アジア大陸2次予選通過。

経験を活かし社会に貢献したい

3年前まで実業団でインドアのバレーボールを6年間プレーしていました。そのときは、パナソニックの社員として人事部に配属され、新人教育や職場環境の改善などの業務に携わりました。ビーチバレーに転向してからは、アルバイトで生計を立てています。また、バレーボールの普及のため、子

どもや大人のバレーボール教室、イベント開催などの活動もしています。

今は、ロンドンを目指して日々トレーニングに励んでいますが、これまでの経験を活かして、社会に貢献したいと思っています。そのためにも、就職してしっかり仕事をしながら、選手と社会人の両立を図りたいと思います。



坂本 鷹志 氏●体操・トランポリン

27歳、日本体育大学卒業。2011年ワールドカップ日本大会個人7位、シンクロナイズド2位。世界選手権イギリス大会、団体1位、シンクロナイズド2位。

ロンドンと、世界新記録を目指して

現在は日本体育大学の助教として、学生に講義をするなどして競技を続けていますが、この3月で契約が切れてしまいます。トランポリン競技は、ワールドツアーに参加すると、年間で延べ1カ月間は海外にいます。それ以外に国内の大会やナショナル・チームの合宿があり、仕事を探すのは難しい現状

です。このような場を設けていただいたことをとても感謝しています。

ロンドンへは最終選考で選ばれるよう頑張っていますが、それ以外の目標として、難易度のカテゴリーで世界新記録を目指しています。手応えは感じていますので、今年のワールドツアーでぜひ樹立したいと思っています。



桜井 美馬 氏●スケート・ショートトラック

22歳、早稲田大学2013年卒業見込み。バンクーバー五輪500m、1000m、1500m、3000mリレー出場。2010年ワールドカップ長春大会1500m3位。

2年後のソチで喜びを分かち合いたい

私は今、早稲田大学スポーツ科学部の3年生で、スポーツと勉学に励んでいます。周りの友達はずでに就職活動を始めていますが、私は練習や大会でなかなか時間が取れません。そこで、このアスナビにエントリーすることにしました。就職できたら自分のできる限りのことを精いっぱいさせていただきたいと思っています。

競技は個人種目の他にリレーもあり、チームワークを大切にしています。社会人になっても、チームワークや人とのつながりを大切にしていきたいと思っています。バンクーバー五輪に出場しましたが、納得のいく滑りはできませんでした。2年後のソチではぜひリベンジしたいと思っています。



小西 ゆかり 氏●
ライフル射撃・ピストル

33歳、北海道八雲高等学校卒業。2010年全日本ライフル射撃選手権大会25mピストル射撃女子優勝。

※ロンドン五輪出場内定。

競技人生をかけたラスト・チャンス

アテネ五輪には、自衛隊員として出場しましたが、3年前に12年間在籍した自衛隊を辞め、今は貯金を切り崩したり、アルバイトをしたりしながら、競技を続けています。

2010年の世界大会では4位でしたが、ロンドンではメダルを取ることが目標です。今回のアスナビは競技人生をかけたラスト・チャンスだと思っていま

すが、このような身で簡単に就職できるとは思っていません。今日はお忙しい中会場に足を運び、アスリートの現状に耳を傾けてくださった皆さまのお気持ちに心から感謝申し上げます。この中の一人でもチャンスを頂けたら、とてもうれしく励みになります。

これからもスポーツを通じて、日本に元気を届けられるように頑張ります。



杉本 宏樹 氏●トライアスロン

30歳、流通科学大学卒業。2011年蒲郡ITUアジアカップ5位、ASTCアジア選手権チャイニーズタイペイ6位、世界選手権横浜大会12位。

心を強化してロンドンを目指す

トライアスロンの実業団は現在2社しかありません。私も2004年から4年間は実業団に所属していました。現在、日本トライアスロン連合が指定する強化選手は男女合わせて37名ほどいますが、ほとんどの選手が、海外遠征や合宿の合間にアルバイトをしながら競技を続けているのが現状です。これで

は、競技としてのトライアスロン自体が衰退してしまいます。

トライアスロンは、自然と向き合い、自分と向き合うスポーツで、心をどう強化していくかが問われます。今後はロンドン出場を目指すとともに、競技を通じて得た貴重な経験を社会に還元できるよう、日々頑張りたいと思います。

■ビデオ・プレゼン

競技者としては仕事の経験も必要



柏原 理子 氏●
スキー・クロスカントリー

21歳、2013年早稲田大学卒業見込み。バンクーバー五輪4×5kmリレー8位。

小学校1年生のとき、自宅の近くで長野五輪が開催されました。以来、五輪を夢見て頑張ってきました。競技者として戦うためには、さまざまな経験が必要だと思っています。社会人として、仕事の経験を積みながら、ソチを目指したいと思っています。

メダルを取ってカヌーを盛り上げたい



羽根田 卓也 氏●
カヌー・スラローム

24歳、スロバキアコメニウス体育大学在学中。2011年世界選手権10位。

※ロンドン五輪出場内定。

高校卒業後、単身でカヌーの本場スロバキアに留学しました。日本ではカヌーはまだマイナー競技なため、トップ選手でも競技生活は苦しいのが現状です。ロンドンでは、ぜひメダルを取って次世代の選手のためにもカヌー競技をアピールし、少しでもこの競技に恩返しをしたいと思っています。

●トップアスリート支援についてのお問い合わせ先

JOC キャリアアカデミー E-mail career@joc.or.jp TEL 03-5963-0355

※受付時間は月曜～金曜の午前10時から午後6時まで

地域活力創造チーム ——大阪ガス 近畿圏部

トップアスリートを中心とした「地域活力創造チーム」を作り、地域の活性化に取り組む大阪ガス。そこには、企業とトップアスリートの新しいあり方が示唆されている。活動の内容や今後の展開について、大阪ガスの稲村栄一氏らに話を伺った。



NOBY T&F CLUBのホームページ



稲村 栄一氏
大阪ガス 執行役員 近畿圏部長

スポーツは自然と同じ 「公共の財産」である

大阪ガスでは、スポーツで得られる集中力や、困難に直面してもくじけずに頑張って目標を達成する力などが、そのまま事業活動に活かせることから、陸上部や野球部をシンボル・ス

ポーツとして力を入れてきました。社員に対しても健全な体でこそ良い仕事ができると、スポーツを奨励しています。しかし、バブル崩壊以降、事業環境も厳しくなり、企業のスポーツクラブが廃止に追い込まれるような中、当社でも、企業スポーツに対する活動が圧縮される方向にありました。

確かにこうした活動には費用も掛かりますが、「広告費」や「社員の求心力を高めるもの」というだけでは説明がつかない何かがあると思うのです。

私は今、野球部の部長をしています。選手たちを見ていると、それぞれにスポーツで培った高い能力や精神力があります。入社当初は教育が必要ですが、選手育成と社会人としての人間育成と

というのは、決して矛盾するものでない、ということもよく分かりました。彼らはまさに「人財」であり企業の資産です。

そして、スポーツというのは、「公共の財産」であるといえます。自然を見て心を癒やされたり元気が出たりするように、スポーツも見ている人に感動や力を与えます。スポーツを支援することは、木を守り育てていくのと同じで、CSRの根幹を成すものと考えています。

2008年に朝原が銅メダルを取った時も、リーマン・ショックで経済が低迷し元気がなかった社内が一気に明るくなりました。東日本大震災後では、なでしこジャパンが日本に頑張る力を与えてくれました。スポーツは元気の源



朝原 宣治氏 大阪ガス 近畿圏部
地域活力創造チーム 副課長

1972年生まれ。五輪4大会連続出場。100mの日本記録を3度更新。2008年の北京五輪4×100mリレーで銅メダルを獲得。2008年に現役引退。

アスリートも一社員として会社貢献したい

僕自身、入社した時は競技者であると同時に、一社員として採用してもらったという意識がありました。競技以外の能力を持たなければこの会社ではやっていけないと、現役の時から競技以外のことに対して積極的に取り組んできました。

引退後のために、スポーツの新しい試みを研究しようと、2006年から同志社大学大学院に行きました。自分自身がネットワークを持っていること、

社会的に認知されていることを活用して、社外に活動の幅を広げて、社会に貢献できることが分かってきました。

アスリートは競技の世界に浸って生きてきたので、入社してすぐに自分の能力を活かしていくのは難しく、初めのうちは指導が必要でしょう。しかし、慣れてきたら、いろいろな仕事に巻き込んでいけば、企業人としてどんどん伸びていけると思います。

であり、私はこれを守りたいと考えています。

スポーツや文化で 地域を活性化

私が所属する近畿圏部は、従来より地域開発、いわばまちづくりが主要な仕事です。インフラ事業が本業の当社では、まちが元気になることがわれわれの利益につながるという発想があります。社外でも活躍できるような人材を活かすことで、戦略的に企業利益につなげていきたいという思いで今年1月に「地域活力創造チーム」を作りました。

このチームには、4人のアスリートがいます。活動の一つに、一般の人や将来のアスリートに向けた陸上クラブ「NOBY T&F CLUB」の運営があります。これは、朝原が2010年に立ち上げたものです。小学生から大人までの4コースあり、陸上のスキルだけでなく、ライフスキルなども提供します。例え

事業としての可能性も 無限に広がっている

自社のスポーツ資産のみならず、社外の資産も視野に入れ、それらをうまくつなげることによって社会を元気にしていきたいという思いがあります。スポーツを通じて、地域に活力を提供し、信頼関係を結ぶことが重要です。活動もすべてがボランティア的なものでなく、一部は有償にするなどして、利益が生まれる仕組みを考えています。他社や他社のアスリートともパートナーシップを結んでいけば、可能性は無限に広がっていくと思います。



石井 智氏 大阪ガス 近畿圏部
地域活力創造チーム マネジャー

大阪ガス野球部で捕手、マネジャーを経験。同志社大学監督、野球解説者を務め、現職。2007年博士号(政策科学)取得。

ば、NPO 法人と組んで農業体験を通したトレーニングを行ったりもしています。NOBY の特徴の一つは、社内のアスリートだけでなく、社外のアスリートにもコーチとして参加してもらっているところにあります。

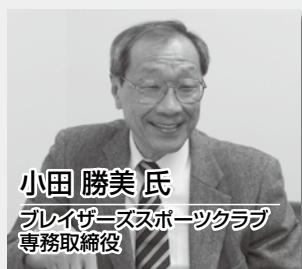
また、地域活力創造チームとしては、スポーツだけではなく、音楽、演劇、その他芸術の分野でも同じような活動をしたいと考えています。ネットワークを活用し、いろいろなものを組み合

わせれば、一社ではできないこともできるようになるのです。今後は、ネットワークを活用して、さまざまなアスリートや団体とのパートナーシップにより、Win-Win の関係を築いていくことを考えています。

まだまだ発展途上ですが、こうした取り組みにより、地域の活性化につなげ、さらに日本を元気にしていきたいと思っています。

新しい企業スポーツ像を求めて 堺ブレーザーズ

堺ブレーザーズは、Vプレミアリーグ所属の名門男子バレーチームである。その前身は新日本製鐵の実業団チームで歴史も古い。しかし、2000年に実業団チームから、新日本製鐵の子会社としてクラブチームへ移行し、これまでクラブチームの先駆けとして、注目を集めてきた。



小田 勝美氏
ブレーザーズスポーツクラブ
専務取締役

モントリオール五輪のバレーボール代表選手であった小田勝美専務取締役は「実業団では、トップダウンであつという間に廃部になってしまつ。新しい企業スポーツ像を求めて設立しました」と当時

の設立の趣旨を語る。運営は一企業が抱える実業団とは違い、数社のオフィシャル・スポンサーからの広告収入が主な収益であり、その他、個人・法人による会費、グッズ販売などの事業収入がある。支援する企業にとっても負担は少なく、一社の財政状態に左右されることのない新しい企業スポーツの仕組みである。

クラブでは、引退後の生活不安を払拭するために、セカンド・キャリアの教育も行い、さらに行政に対してモスポーツ指導員や教員としての受け皿を求めている。

小田専務取締役は、より経営基盤を強化するためには、チームが強くなること、そして地域に密着することが重要な課題であると語った。



2020年オリンピックを東京に！ ～日本の新しい成長を世界に示す～



2020年オリンピックを東京で開催する——その意義はどこにあるのか。長年オリンピック取材してきた宮嶋泰子アナウンサーが、元アスリートでもある山下泰裕氏と橋本聖子氏に迫った。スポーツにとどまらない広い視野での招致の意義が示された。

オリンピックには、国を一つにする力 人々の心身を健康にする力がある

宮嶋：今、オリンピック東京招致への活動をされていますが、お二人のオリンピックに対する思いをお聞かせください。

山下：今の日本には元気がありません。心の健康に不安を抱えた人も非常に増えています。活力ある日本を取り戻す上で、オリンピックには大きな力があると思います。

橋本：日本は東京、札幌、長野で3度オリンピックを経験してきました。このオリンピックを通して、若い人から人生の大先輩までが心を一つにして日本を応援するエネルギーは、どんな政策をもってしても生み出せないほどの大きな力があると感じます。

山下：東京オリンピックが開催された1964年、私は小学1年生でしたが、その時の記憶は今でもはっきりと脳裏に焼き付いています。中学生のころには文

集に「将来の夢は、オリンピックに出場し、メインボールに日の丸を掲げて君が代を歌うこと」と書いていました。オリンピックは若者に夢を与え、国民を元気にさせるパワーがあります。

橋本：人々をスポーツに向かわせる力もありますね。これは「生涯スポーツ」という点にもつながってきます。現在、日本の医療費は約36兆6000億円(2010年度)で、なおかつその額は毎年約1兆円規模で膨らんでいます。予防医学の観点からも、スポーツで体を動かす重要性は高まっています。オリンピックを通じたスポーツの振興が、ひいては医療費の抑制にもつながるのではないのでしょうか。

山下：スポーツ担当大臣の国際会議では、「生涯スポーツの振興に1ドル投資することは3.2ドルの医療費削減の効果につながる」とも紹介されています。トップアスリートの活躍が、人々の健康にもつながるわけですね。

スポーツは人生の先行体験 必要な要素がすべて詰まっている

宮嶋：スポーツは身体的な健康だけでなく、精神力をも養うものだといわれます。スポーツの促進が、心を鍛える上でどのように役立つとお考えですか。

山下：一つ気がかりなのは、若者のコミュニケーション能力が不足しているように見えることです。人と関わらずにできる仕事なんてないのではと思います。自分の思いを相手に伝える、相手の思いをよく理解する、そして協力し合う。こうした力はスポーツを通じて養うことができます。

橋本：私がスポーツをやってきて一番良かったと感じられるのは、自分を律する術を学べたという点かもしれません。自分に厳しくなければ、体を鍛えることも、目標を達成することもできません。さらに、スポーツで大切なのは技術の向上だけでなく、行動規範を守ることでできる、人としての品格を



身に付けることです。これは、特に日本を代表するトップアスリートには欠かせません。私は、いくら競技に強くても行動規範を守れない選手は代表に選ぶべきではないと思っています。そうして養われる人間力は、アスリートが競技生活から引退した後も、必要不可欠になってくるものなのです。

山下：本当にその通りだと思います。スポーツは、人生の先行体験だといえます。目標に向かって努力する、仲間と協力する、勝つために思考を巡らせる、ルールを守り戦った相手をも尊重する、フェアプレーの精神を持つ。スポーツにはこれらすべてが詰まっているのです。スポーツで得たものは、仕事の資質というものにもつながってくるのだと思います。

オリンピック東京開催で 世界に貢献する日本を示す

宮嶋：話を再びオリンピックに戻しま

すが、お話を伺っていると2020年大会の招致にはメダル獲得以上の、何か遠大な目標があるように感じます。オリンピック東京開催の意義や目的などをお聞かせください。

山下：招致にあたって、「日本は金メダルを何個取る」という目先のことばかりに固執してはいけないと思うのです。たとえメダルが取れたとしても、日本人が見失いかけた心を取り戻し、力強い活力ある日本にしなければ意味がありません。オリンピックはそのきっかけとすべきです。

橋本：1964年に開催された東京大会は、高度経済成長期のまっただ中の大会で、さらなる成長の起爆剤になりました。そして日本は経済成長、技術立国の道をひた進み、発展を遂げました。しかし、今の日本は、震災による原発事故により、これまでのエネルギー政策や環境に対して、もう一度原点に戻って考えなければなりません。2020年のオリンピックは、そうした日本の経験や環境技術などを世界に示していけるものにすべきです。

山下：3.11は私たちの生き方や価値観を考え直すものになりました。便利で快適で物質的な豊かさがあったとしても、内面的な豊かさがなければ駄目なのです。今、勢いのある国も、いずれはこうした課題を抱えるでしょう。今回の

震災で、たくさんの国が日本のために支援をしてくれました。これに日本は応えなければなりません。私は、地球に人類が存続していくために、世界が平和であるために、日本が世界に果たしていける役割があると思うのです。

橋本：日本は今、「謙虚なリーダーシップ」を発揮するべき時に来ていると考えています。世界の先頭を走ってきた日本が、高度成長期とは違う、成熟社会の新しい成長のあり方について、世界を引っ張っていくことをアピールするべきと思うのです。こうしたメッセージを発信することができなければ、日本にオリンピックを招致する本当の意味がないのではと考えています。

山下：今、日本から海外に出ていく学生が激減しているようです。中国をはじめとした成長国で若い人がどんどん海外に出ているのとは対照的です。今回の震災のボランティア活動を見ても日本人は素晴らしい力を持っています。オリンピック東京招致をきっかけに世界にもっと目を向け、世界における日本の役割をあらためて考えてほしいと思っています。

宮嶋：オリンピックで日本が元気をもらうのと同時に、日本の新しい成長を世界に示し、積極的に日本が世界に貢献していく姿勢が必要ということですね。本日はありがとうございました。



山下 泰裕 氏

1957年生まれ。ロサンゼルス五輪、柔道無差別級で金メダルを獲得。84年に国民栄誉賞を受賞。東海大学理事・副学長、全日本柔道連盟理事、神奈川県体育協会会長。



橋本 聖子 氏

1964年生まれ。夏季・冬季合わせて7回のオリンピック出場。アルペールビル五輪 スピードスケート 1500m で銅メダル獲得。95年より参議院議員、日本スケート連盟会長。

宮嶋 泰子 氏

1955年生まれ。テレビ朝日アナウンサー。アスリート取材を手掛けるスポーツ・ディレクター、また女性スポーツ実況アナウンサーとしても活躍。オリンピックでの取材は1980年のモスクワ五輪から15回を数える。

